

つくほ治療院新聞

通巻34号

本当の医の姿とは…

先日こんな記事に目がとまりました。『平成22年に人間ドックを受けた308万人のうち、検査値に異常が無い健康者は過去最低の84.4%と人間ドック学会が発表した』というものです。年々医療費が増大し国の財政を圧迫しているにも関わらず、日本の健康者は一割にも満たないというのです。このデータは人間ドックを受けた人が対象ですから、基本的に問題なく日常を過ごしている人たちが対象です。普段病気で通院や入院している人はあまり受けられないでしょうから、全国民ではもつ

と低い数字が出るのではないのでしょうか。保健の効かない人間ドックを受診するくらいですから、普段から健康への意識は高いはずですから。ですから、検査結果で異常と出れば多くの人は治療を始めるのではないのでしょうか。

そこで、私はこんな記事が目についてなりません。『7月、子宮頸がん予防ワクチンを接種した女子中学生が2日後に死亡』『イレッサ訴訟。副作用が少なく効果が何倍も高いと謳ったが800人以上が死亡』

『卵巣がん検診を受けても受けなくても亡くなった人数に有意差がないので、摘出手術は過剰な治療ではないか』他…

現代医学の誕生で、多くの人が救われたのは間違いありませんが、その一方で、予期せぬ病気に罹ったり命を失ったりしているのもまた事実です。今回の震災前は災いを防ぐ『防災』をうたっていたいま

したが、震災後は全ての災いを防ぐのではなく、いかに被害を少なくするか『減災』に変わりました。病においても同じことがいえるのではないかと思えてなりません。



『熱心の弊害』

人は、物事に熱心に取り組んでいるときほど、他人が自分ほど熱心でないように見えて、その相手を責めたり、とがめたりする気持ちになりやすいものです。また、自分とは考え方や仕事のやり方が違う人を受け入れる心の余裕を失いやすく、かえってもめごとを起こしやすいのです。

つまり、自分が努力すればする程、熱心でない人を責めたり、熱心さを人に強要したりして、相手に不快な思いを抱かせる傾向になりがちです。更に、自分こそが、自分だけがよくやっていると自覚してしまったり、相手の存在を無視してしまい、人との共感的なつながりを切ってしまうことにもなりかねません。熱心さはすばらしい事ですが、その中に潜む弊害にも注意したいものです。

「一日一話」より

10月の定休日

○印はお休みです

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					



印堂

(いんどう)

顔の正面、左右の眉の間の、ちょうど真ん中にある、仏像の額にもみられます。



慢性的な鼻づまりをはじめとして、鼻水・鼻血・蓄膿症・慢性鼻炎などに伴う頭の重苦しいような不快感など、鼻のいろいろな病気とその症状緩和のために多く用いられます。また、めまいやひきつけなどにも用いられることもあります。

「総合診療科」

総合診療科とは、内科や外科などと同じように医療における診療科の一つを言います。本来医療とは、病人を全人的に診るはずだったので、現代医療が専門家・細分化し過ぎたために、頭が痛い時に内科に行けばよいのか、脳神経科、はたまた神経内科なのかと何科を受診すれば良いのか分からないようになってしまいました。そんな時にどの科に行けば適切な診療を受けられるのかを見極めてくれるのが総合診療科です。また、糖尿病があつて

心臓にも疾患があると内分泌科の後に循環器科とハシゴしなければなりません。専門性の高い医師ほど、専門外の病気を診るのが苦手だったりするので、病気を広く診ることを仕事として、総合診療科の必要性が高まっています。78年に入り佐賀県で初めて総合診療部が創設され、90年代に入ってから全国でも設立されるようになりましたが、まだまだ一つの科としては確立しておらず、今後が期待されます。



院長の独り言

人がかかっている病気を治す事ばかりに目を向け過ぎてしまうと、部分・部分・部分…となって、その症状を抑えると他に症状が出てきてしまい、またそこを抑えると他に出てきてしまう事があります。A薬の副作用を抑えるために、B薬を飲むといった具合でしょうか。人間は機械ではないのですから、部品ばかりに目をむけるのではなく、人体という全体を診て『病気に苦しむ人』を治すことが必要になります。医療とは本来こうであつたはずなんです。

昔は、かかりつけの町医者というのがあつて、何か問題があれば、まずそこへ行き診察してもらい、必要であれば処置をしてもらい、もっと専門的な診察が必要であれば、紹介状を書いてもらい救急に回すなりしてもらったものです。私たち鍼灸師の頑張りが足りないのも問題なのですが、町医者が減った現代では、私たちがその代わりをしなければならいのではないかと思います。しかし、国民皆保険の現代では、限られた特定疾患のみ保険適用となる鍼灸は最後の選択肢となっています。せめて、総合診療科で診察し、検査上問題がなく、薬が不必要な場合は、とりあえずの薬を出すのではなく、鍼灸(科)を紹介してくれる時代が来るといいのですが…。

《連載》東洋医学講座

診断の目標

いよいよ患者さんの身体を診て『診断』していきます。が、西洋医学と東洋医学の『診断』は、ちよつと意味合いが違ってきます。

西洋医学における診断とは、血液検査やMRIなどの検査機器を用いて分析的に病気の原因を明らかにし、病名を決定する事です。病名が決定する事と治療法が決まる事とは別のものなので、診断と治療は分離しています。そのため、さまざまな原因が複合して発病している場合や初めてぶつかる症例などは、診断が付かなかつたり、病名が付いても治療法が分からないといった事があります。

対して、東洋医学における診断とは、脈を診たりお腹を診たりと独自の診断方法を駆使して、診断名を付けると同時に治療方法も決まってきます。例えば「肝虚」という診断名が付けば、種々の治療法則に基づいてツボや手技が決まってきます。



東洋医学は長い歴史の中で、このツボを使ったら効果があつた無かつたと試行錯誤を繰り返して治療法が確立されて来ました。その上で、この治療法にどのような場合がより適合するかと繰り返し経験を重ねてきたので、まず治療が出来るという事が大前提にあります。世の中にはいろんな病気があつて全て理論的に説明が付くわけではありませんが、脈を診てお腹を診て診断が付けば、治療出来るのが東洋医学の特徴です。

医食同源

サバ

胃腸を丈夫にし、体力をつけるので、元気がなく、疲れ易い時に良いとされます。また、DHA&EPAが豊富なため、コレステロール値を低下させ、血栓を防ぎ、生活習慣病を予防します。タウリンを多く含み、心臓の働きや肝臓の解毒作用を強化させます。

執筆余話

嫌だ嫌だで迎えた30代。気が付けば、10月で39歳になり、30代最後の年が始まるうとしていきます。あれだけ嫌だった30代も振り返ってみるとなんと有意義な30代でした。結婚、出産、開業など色々ありますが、様々な治療法をみてきて、一番と思える経絡治療に出会えた事がなにより財産です。今となっては、早く年を取りたいと思うほどです。早く老けたいという意味ではなく、一年一年の経験をもっとたくさん重ねたいという意味です。治療させていただけの患者さんに感謝すると共にこれからも宜しくお願い申し上げます。

